

42125

教科書文庫

4
810
42-1909
200030
2296

Kodak Gray Scale

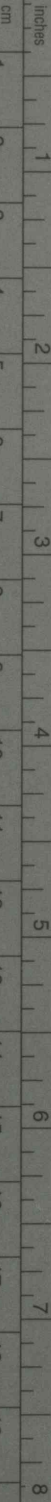
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

3759
MeJ
資料室

訂正
高等女子讀本
卷三



375.9
Me9

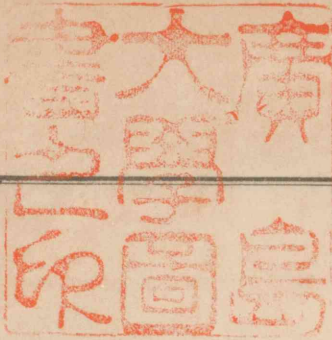
資料室

明治四十二年二月四日

文部省檢定

師範學校高等女子學校國語科用

42767



再訂高等女子讀本卷三目次

- 一、習慣……………一
- 二、皇后陛下御歌……………四
- 三、禽獸の教育 附俚諺(口語)……………六
- 四、上野公園の四季……………一四
- 五、博物館見物に誘ふ文……………一八
- 六、寶石……………二〇
- 七、貨幣……………二五
- 八、鈴木今右衛門……………二八



再訂高等女子讀本卷三目次

再訂高等女子讀本

佐藤 球 校訂
明治書院編輯部編

東京 明治書院

九、	漁父の辭 <small>(新體詩)</small>	三二
一〇、	瀬戸内海.....	三五
一一、	自然の音楽.....	三九
一二、	マリブラン女史その一.....	四二
一三、	マリブラン女史その二.....	四六
一四、	アメリカ行の話 <small>(口語)</small>	五一
一五、	京城.....	五七
一六、	支那人の長所.....	六二
一七、	格言.....	六七
一八、	龍華寺の富士.....	六八

一九、	富士山の頂上.....	七二
二〇、	海豹島.....	八〇
二一、	草花.....	八三
二二、	秋蟬 <small>(新體詩)</small>	八五
二三、	暴風見舞の文.....	八六
	同返事.....	八八
二四、	魚とイソギンチャク <small>(口語)</small>	九〇
二五、	瓜哇航路.....	九八
二六、	誠實の接待ぶり.....	一〇三
二七、	歸朝みやげ <small>(口語)</small>	一〇八

二八、茶の湯と生花……………一二四

二九、足利義政の好事……………一二八

三〇、北京籠城日記その一……………一二一

三一、北京籠城日記その二……………一二六

卷三目次終

再訂高等女子讀本卷三

一、習慣

習慣

人は、幼少より、善き習慣に長ぜむことを要す。蓋、少年の中に、習慣となれることは、終身、永續して、變ぜざればなり。たとへば、木の皮に、文字を刻むがごとし。その木の長ずるに隨ひ、文字も、大になるなり。兒童の時、その、後來、行くべき道の中に入れて、教育すべし。然らば、年、長大なるに及びても、その道を離

長大

起初

發軔

れて、背くやうのことなかるべし。起初の中、既に、結果を包含す。一生の道路は、發軔の時に、方向、既に、定り、後來の命運も、亦、ここに決するなり。

品行

ロルド、コリンウッドは、その愛する一少年を誠めて、いはく、汝、未、二十五歳に至らざる前に、終身の品行を立つべきを要すと、いへり。

習慣は、年の長ずるに隨ひ、勢力を長じ、これより、品行を生ぜしむることなれば、既に、習慣つきて、品行となれるものを、長大の後、新に、別路に轉ずるは、甚、難きことなり。およそ、人、既に知りたることを、忘

れむと欲するは、いまだ、知らざることを學ぶより、實に、難し。

昔、ギリシヤに、善く、笛を吹く人ありき。その弟子の、以前、拙き師より學びしものには、常に倍する修金を、出さしめたりと、なり。

舊(旧)

懶惰

まことに、舊習を除き去ることは、齒を抜くよりも、苦痛、甚しきことなり。試に、懶惰にならへる人、妄りに金錢を費す人、或は、酒を嗜みて癖を成したる人を教訓して、その行を改めしめむとすとも、能く、改め得べきもの、十に一二も、あらざるべし。蓋、これ

明哲

らの習慣久しく、既に、深き疵となり、體中の全部を成したれば、これを除き去ること能はざるなり。されば、リンチの言に、善き習慣を形づくらむと、謹みて、心を用ふる習慣こそ、最、明哲なる習慣なるべけれ」といへり。(中村正直―西國立志編)

二、皇后陛下御歌

水は器

水はうつはに、
そこのさまさまに、
志たがひて、
なりぬなり。

心の駒

人もまじはる、
よきに悪しきに、
己にまさる、
えらび求めて、
心の駒に
まなびの道に
友により、
うつるなり。
良き友を、
もろともに、
むちうちて、
進めかし。

金剛石

金剛石も、
たまの光は、
人も學びて、
みがかずば、
添はざらむ。
後にこそ、

時のま

まことの徳は、	あらはるれ。
時計の針の、	たえまなく、
めぐるが如く、	時のまの、
ひかげ惜みて、	勵みなば、
いかなる業か、	ならざらむ。

同胞

三、禽獸の教育

小鳥類の子供が親、或はその他の、成長した同胞から、歌ふことを習ふのは、誰も、知つて居ること、多少、種類の違つた鳥でも、卵の時から、或は、幼雛の

固有

熱心

時から、ある、他の鳥に育てさせると、成長する間に、養ひ親の歌を覚えて、自分の種屬に、固有な歌とは、全く、違つた歌を、巧に、歌ひ得るやうになる。小鳥を、熱心に、飼ふ人は、自分の鳥の、聲をよくするためには、よい聲を有する鳥の側へ、連れて行つて、これを習はせ、又は、これと、競争させて、益、聲を發達させよう、と計るが、これを見ても、鳥の聲などは、教へ様によつて、如何やうにも、進歩させることの、出来るものであることがわかる。

鳥類には、その子に、歌を教へるものがあるばかり

習性

明瞭

りてばない。或は、餌を啄むことを、教へるものがあり、或は、飛ぶことを、教へるものがあり、或は、遊ぶことを、教へるものがある。これらのことは、詳しく、鳥類の習性を観察した人が、記載して置いたものを見ると、明瞭にわかるが、自分でも、少し、注意して居れば、實物から、いくらでも、見ることが出来る。

鶏が、澤山の雛をつれて、庭に、餌を拾ひ歩いて居る所を見ると、親鳥は、餌を見出す度毎に、雛を呼び集め、みづから、餌を啄んでは、雛の集つて居る中へ落して、その地面に當つて、跳ね散る所を、雛に拾は

練習

藝術

せて居ることがあるが、これは、雛に、餌を、速に、啄むことを練習させて、居るのであらう。地上に落ちて動く、小さな餌を、巧に、速に、啄み取るには、眼の働も、十分でなければならず、又、頸や、背を動す、種種の筋肉が、皆、調和して、働かなければならぬ。さうして、種の筋肉の、調和した働といふものは、練習の結果として、はじめて、完全に、出来るものであることは、ベースボール・ローンテニスの如き遊戯でも、書畫・裁縫の如き藝術でも、皆、大に、練習を要すると、いふことを見ても知れる。

目的
方法

ある博物家が、海鳥が、雛に、遊ぶことを教へる所を、精密に、観察して、書いて置いたものを、讀んだことが、あるが、慥に、一定の目的と、方法とが、具つてあるやうに思つた。

まづ、親鳥が、一匹の魚を捕へ、半殺にして、雛の頭より、一・二尺、隔つた所へ放し、これを捕へさせ、幾度も、同じ事をやらせて、一・二尺の所ならば、百發百中、必、餌を捕へることが出来ること云ふまでに、雛の技術が、熟練すると、次には、尙、一尺も隔つた、稍、遠い所へ、魚を置いて、これを捕へさせる。かやうに、次第次

百發百中

熟練

飛翔

第に、導いて、終には、全く、手放しても、獨立の生活が出来て、出來るであらうと、見込の付くまでに、仕上げて、然る後に、親鳥は、實際、雛を手放すのである。先年、上野の動物園で、鶴が、雛を孵かしたときも、雌・雄の親鳥が、丁寧に、これを養ひ育て、初は、鱸を、小さく切つて、食はせ、次には、鱸を、水中に游がせては、これを捕へる練習をなさしめ、雛の翼が、少しく、發達してからは、親鳥が、先に立つて、一度、左へ向うて飛べば、次には、右に向うて飛ぶと、いふやうな順序に、規則正しく、飛翔の方法を、教へて居るのを見た。

與(与)

次に、獸類について見ても、同じこととて、子を教へる種類は、決して、少くない。猫を飼つた人は、善く、知つて居るであらうが、親猫が、鼠を捕へると、必、これに、傷をつけて、全く、逃げ去ることの出来ぬだけに、弱らせおき、生きたままて、これを、子猫に與へて、鼠を捕へ、噛み殺すことの練習をさせる。インドで、虎狩をした人等の、書いたものを見ると、同じ様な事が、書いてある。即、親虎を打ちとつてから、その巢を調べて見たら、山羊や、野牛の屍體に、頸などの如き、急所には、大なる齒の痕があるが、他の所には、小さな、

體(躰)

子虎の齒の痕が、澤山、ついて居たと、云ふことである。これから、推して考へると、猛獸類では、子供に、餌となる獸類を、捕へたり、噛み殺したりすること、練習させることは、常であるやうに、思はれる。

複雑

さて、此等の動物は、動物中の、最、高等なるもので、身體の構造も、複雑で、筋肉も、腦髓も、非常に、發達して居るから、たとひ、幼兒が、親に保護せられ、養はれて、大さだけは、一匹並に、成長しても、筋肉や、腦髓の働が鈍くては、到底、生存競争に打勝つて、子孫を残し、種屬を維持して行き得るといふ、十分の見込が

並(並)

立たぬ。それ故、これらの動物は、唯、子を生んで、保護し、養ふのみならず、尙、これを教へ導いて、筋肉・腦力を練習せしめ、然る後に、初めて、これを手放すのである。（丘淺次郎—進化と人生）

○

撓めるなら若木のうち。

人の態見て、我が態なほせ。

四、上野公園の四季

薄ススキにふけたる武藏野ササの月も、今は、屋根より出て

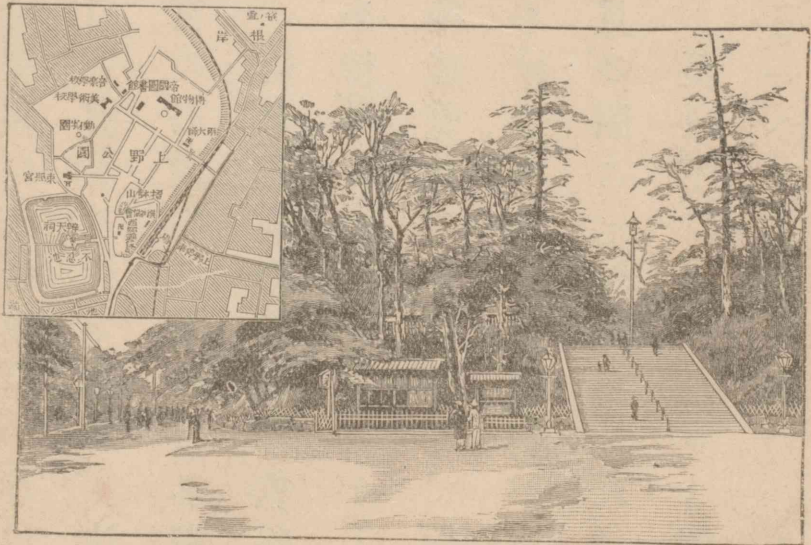
て、屋根に入る東京の内に、思ひもかけざるは、上野の公園なり。林こぶかく、池、ひろびろと、湛シひて、東照宮の石段を、おりのぼる靴の音、朝夕に絶えず。

春は、摺鉢山シの彼岸櫻咲きそむる頃、太郎は、休日を待ちえて、父をうながし出でたるにやあらむ。美術展覽會の前に立ちて、切符もとめむとするも、樂しげなり。見よ見よ。何がしのかける、元祿時代の花見の圖こそ、評判高けれ。

夏は、不忍池の蓮見る朝花の開く時には音ありと、いへば、われも聞かむとて、辨天のあたりに集れ

切符

笹の雪



る人人、いと、おほし。紅なる花、緑なる葉、さしもに遙けき、水を埋めて、かうばしき風、袂を吹く。根岸には、笹の雪とて、朝とく、豆腐煮て、客待つ家あり。入谷の朝顔見がてら、かしこを訪ふも、一興なるべし。

秋は、山王臺の梢いろ

床几

小春
回咲

づく夕、まづけき茶店の床几をまめて、鴨脚樹の落葉を拾はむとすれば、紅葉も、ひらひらと、盆の上にと飛び來る。折しも、つきいだす鐘の音を數ふれば、早くも四つ。

冬は、枯れたつ木の間より、池の水鳥見渡したる景色、あれあれと、童のいふは、一むれ、空に飛びたつなり。ひらめく翼、あるは、雪の如く、あるは、落花とも見ゆ。小春の日かげ暖にして、回咲の櫻かざしたる少女は、西郷の銅像を見上げつつ、犬こそよく出來たれなど、評せり。天和田建樹—藻鹽木

五、博物館見物に誘ふ文

春も深くなりて、日あしも、やうやう、長くおぼえ候ふ折、かねて、御約束の帝室博物館見物の事、おもひ立ち、昨日、その掛員の人に、問合せ申し候ひしに、丁度、この頃、珍しき品ども、陳列せられたるよしに候。ついては、明後日は、休日にあたり候へば、朝より、出かけ申したく存じ候ふまま、あなた様の御都合、うかがひ上げ候。尤、隅から隅まで、見るわけにも候はねば、わづかなる時間にて、見終り申すべく、ただ、

陳列

百聞は一見に若かず

氷解

盆栽

半日の御暇候はば、御供出来候ふ事と、存じ候。書の上のみにては、わかりかね候ふ物も、百聞は一見に若かずとか、申し候ふ如く、かしこにいたり、實物にあたり候うて、いつも、氷解する事に候へば、この度の珍品についても、かならず、幾多の發明あることと、存じ候。また、時間のあまりも候はば、盆栽の展覽會も、この程より、開かれ居り候ふとか、承り候へば、ついでに、見めぐり候はむも、面白かるべく候。もし、御都合かなひ候はば、誠に嬉しく、路順なれば、御宅へ參り、御誘ひ申すべく候。かしこ。

寶(宝)

粧飾

六、寶石
世に多かる寶石の中に、人の最貴ぶものは、金剛石なり。衣服指環をはじめ、其の他、諸種の粧飾に用ひられ、まかも、其の大き僅に、大豆ほどに過ぎざるものも、その高價なること、まことに、驚くに堪へたり。

玻璃

金剛石は、一見、玻璃と異なることなけれども、一度、これを、日光に映し、又は、燈火に照すときは、忽、燦爛たる光を發して、まばゆきまでに、輝くなり。この

萬(万)

切瑩琢磨

光こそ、金剛石の命ともいふべきものにして、歐米の婦女等が、萬金をも、惜まざる所以なれ。かかる光は、はじめより、あるにはあらずして、幾たびか、切瑩琢磨の功を積み、はじめて、その光輝を發するに至るなり。

價值

堅牢

截斷

されど、金剛石の價值は、ひとり、其の光輝のみにあらず、また、其の質の堅牢なるにあり。其の堅牢なることは、萬物中、これに比すべきものなく、如何なる、堅き金石といへども、金剛石を用ふるときは、容易に、截斷し得ずと、いふことなし。

價格

金剛石につぎて、價值あるものを、紅色のルビーとなす。その他、サファイヤ・トッパズのごときも、また、寶石の中に入るべきものなり。オパールに至りては、その價格、大に下りて、寶石の最下流に位す。

特殊

寶石は、ひとり、その外見の美しく、その價格の貴きが爲のみならず。また、その物質の上より、わが自然界の特殊なる産物として、頗、珍重すべきものなり。科學者は、これを「土の花」と呼びて、彼の美しき、植物の花に比せり。まことに、かの美しき植物の花びらが、その葉・根・幹をば組成せる物質と、同じもの

變形
化成

より成れるが如く、寶石も、また、彼の陶器となり、煉瓦となる、その同じ土塊によりて、組成せられたるものなり。ことに、金剛石は、全く、石炭と、その質を同じくせり。ただ、いかなる力により、いかなる理由によりて、かかる美しき變形を、化成したるか、といふことにつきては、今日、なほ、不明の事に屬して、我等は、ここに、その説明を與ふること能はざるなり。

發散

金剛石を、酸素の中に入れて、燃燒する時は、その成分は皆、炭酸となりて、發散し、一物をも留めざるに至る。これ、その、炭素より成れること、明らかなり。

百般

されば、この理を推して、人工を以つて、金剛石を製造せむと欲し、百般の試験を施しし人も、少からざりしかど、終に、その目的を達すること能はずして、僅に、極微のものを得たるに過ぎざりきと、いふ。

最初に、金剛石を發見せしは、インドにして、ブラジル之に次ぐ。南アフリカのキムバレーも、亦、有名なる産地なり。金剛石は、大抵、山岳の、最、堅く、最、舊き岩石の層中に、混入せるを常とす。これを採掘するには、此等の岩石の崩壊せる處につきて、その砂礫を集め、これを河水に洗滌して、探し出すなり。キム

洗滌

崩壊

採掘

従事

圓(四)

バレーに於ける採掘者の數は、六千人に餘り、ブラジルにては、數萬の黒奴、これが採掘に従事せり。金剛石の大なるものに至りては、其の數、甚、少きを以つて、隨つて、其の價の貴きことも、亦、いふばかりなし。現に、ロシア帝室の所藏にかかる大金剛石の如きは、その昔、同國の商人が、インドより買ひ來りし時にても、實に、八十萬圓の高價を拂ひしものなりと、いふ。

七、貨幣

希望
交換

この世の未、大に、開けざりし時代には、人人、その、みづから用ひて、餘ある物品を以つて、他の希望する物品と、交換して、纔に、その用を辦じたりき。

奔走

されど、ここに、漁夫ありて、米を得むと思ひて、魚を携へて、近隣の農夫を、たづねたりとせむに、農夫、もし、魚を希望せずして、織物を希望すとせば、漁夫は、更に、織物を有する人を、たづねて、まづ、これと交換し、その織物を携へ、再、農夫を、たづねて、米と、交換せざるべからず。もし、不幸にして、織物を有するものを、たづね得ずば、漁夫は、また、更に、處處に奔走し

容易

媒介

て、魚を希望する、他の農夫を、たづぬる外なかるべし。かくの如き困難、豈、人の、堪ふることならむや。されば、人智、漸進むに隨ひて、人の、一般に希望する物品を以つて、他の物品と、交換する時は、人の、容易に、受取るべきことを、さとり、遂に、それを以つて、すべて、物品と物品とを、交換する場合の、媒介となすに至れり。この媒介物は、即、貨幣なり。

昔は、貨幣に、牛・羊や、五穀や、皮革や、布・帛や、貝殻など、種種なる物品を用ひしことあれども、今日、文明諸國にては、一般に、貨幣として、金・銀を用ふる事と

本位貨幣
補助貨幣

なれり。わが國、今日の貨幣は、金貨・銀貨・白銅貨・青銅貨の四種なり。その内、金貨を以つて、本位貨幣とし、銀貨・白銅貨・青銅貨を、補助貨幣とす。(坪内雄藏)

饑饉

八、鈴木今右衛門

天明卯年の凶作に、奥州の津輕・南部、最、饑饉し、凡、足腰の立つものは、四方に走りて、食物を求む。羽州秋田の如きは、隣國のことなれば、餓人の來ること、數萬人に至れり。さて、秋田の地も、また、凶年にて、救ひおほすること能はざりしかば、その餓人、溢れて、

路頭

盡(尽)

役義

身代

また、鶴岡にゆくなど、路頭、餓人にて、押しあひきとなり。食を得ざる者は、忽、その地にて、餓死するにより、鶴岡の人も、各、その救助に、力を盡しけり。
その中に、わきて、あはれに聞えしは、鈴木今右衛門といふ者にて、もとは、鶴岡の中間頭を勤めし者なりしが、いささかの貯も出來しかば、近き頃は、役義をひきて、自耕作して、世をわたりけり。この人、元來、慈悲の心深く、この度も、身代の限を出して、餓人を救ひけるに、なほ、夥しき餓死を見ては、いとど、忍び得ず。そのために、所持の田畑、竝びに、諸道具等ま

晴の衣服

で、ことごとく、賣り拂ひたり。

その妻も、また、心だてよき女にて、自分の衣服の類を、大かた、賣りつくし、あとには、僅に、晴の衣服、二枚残りしを、ある日、それをも賣りて、救はむと、いふ。今右衛門、これを聞きて、女は、ことに、衣服などを愛する者なるに、これをも賣りて、餓人を救はむと、思ふは、殊勝の事なり。然れども、男とちがひ、また、外へ出づる時は、著替の一つは、なくて、かなはざる事なり。そはやめよと、いひしに、妻、さればこそ、此の著がへをも賣らむと、存ずるなれ。著がへあるが故に、

殊勝

斷(斷斷)

外へ出づる心も出でなむ。外へ出づるが故に、櫛も簪も、入用なり。今これを賣りて、外へ出づることを斷たば、櫛も無用なり。簪も、また、無用なり。無用の物には、心も残らず候ふ。これをも、賣拂ひなば、また、餘程の人をも救ひ得べしとて、つひに、みなみな、賣りて救ひぬ。

その娘、十二歳になりけるが、同じ年頃の小娘、饑ゑ疲れ、食を乞ひて、門に立てるを見れば、餘寒の嵐はけしきに、やうやう、解物のひとへ一枚を、身に纏ひたるのみ。母親見かねて、わが娘を呼び、そなたは、

餘寒

解物

得心

綿入二枚を重ねて、あたたかに著たるが、あの子は、
 誠に、不便なる有様なり。年のほども、同じ位なれば、
 衣服も、ほどよかるべし。おひおひ、暖氣にもなるべ
 ければ、その綿入一枚ぬぎて、かの小娘にとらせず
 や」といへば、娘、心よげに、得心して、上に著たる、よき
 方の綿入を與へたり。父母、ともに、涙を流して、悦べ
 りとぞ。この父母ありて、この娘ありとや、いふべか
 らむ。(橘南谿―東遊記)

九、 漁父の辭 (武島又次郎)

真楫

綱手

黒雲すごく、おほふ時、
 青雲たかく、むせぶ時、
 とるや真楫の、いさましく、
 沖べをさして、出づるなり。
 汐風あらく、さわぐ時、
 村雨くらく、そそぐ時、
 ひくや綱手の、うちはへて、
 はてなき水に、あさるなり。
 むなしき心、安ければ、
 さかまく浪も、おどろかず、

荻生

名は釣絲の、輕ければ、
 ちぢの黄金も、うらやまず。
 岸の荻生に、火を吹きて、
 焼くや釣りえし、鱸魚一尾、
 濁れる酒に、うた謠ふ、
 わがたのしみを、誰か知る。
 影志く月の、白がねに、
 照りそふなみの、花のなか、
 わけゆく權の、露にほふ、
 そのをかしさを、誰か知る。

點綴

生の限の、憂さつらさ、
 人にそなふる、むくいには、
 ながめつきせぬ、海と山、
 みな我がものと、知れよ人。

一〇、瀬戸内海

淡路の島より、馬關に至るまでの間、内海、波靜に
 して、一面の青疊を敷きたるが如く、大小の島嶼、そ
 の間に點綴して、風光、畫けるが如し。世に、瀬戸内海
 といふは、是なり。

蜿蜒 連綿 侵蝕



その形、東西に長く、南北に狭く、長さ、およそ、百二十里、幅、一里半より、十五里に及べり。北には、中國の山系、蜿蜒として、山陰、山陽、兩道の界に横たはり、南には、四國の山系、連綿として、四國の中央を劃せり。その昔は、今の中國と、四國と、陸地によりて、相聯絡せしものなりしを、海水の侵蝕、地下の變遷によりて、いつか、

浩蕩 隱見 餘波

相分離して、中間の陸地は、全く、海中に陥落し、かくて、ここに、瀬戸内なる多島海を、化成するに至りしなりと、いへり。志かして、その島嶼、および、沿岸の岩石は、多く、花崗岩より成れり。
春霞淡路の島山をこむるころとなれば、山影、淡く、空中に消え、一望の麥畝は、遠く、浩蕩たる碧浪の末と、相接し、農家・漁舍、その間に隱見せる風景、まこと、いふべからず。やがて、東南風の季節となれば、風は、四國中央の山系にささへられて、その餘波のみ、かすかに、來り、海面は、浪ゆるやかにして、細紋を

清艶爽涼

風霜

織り夜に入りては、氷の如き玉兔、その間に躍り出
 てて、波に映ずるさま、閃閃として金蛇の走るが如
 く、その清艶爽涼、たとふるにもなし。漸にして、秋
 氣、長空に満ち、風霜、島山を侵せば、林樹、或は、黄に、或
 は、紅に染めなして、宛、錦繡を曝せるが如し。殊に、小
 豆島なる、寒霞溪の紅葉を以つて、勝れりとす。秋も、
 いつしか、過ぎて、嚴冬の節となれば、降雪の白色は
 花崗岩の白色と、相映じて、益、その光を添へ、風趣、更
 に、一段の美を加ふ。春夏秋冬、その風光のつきざる
 こと、かくの如し。去かして、一たび、舟を、この間にや

風趣

圍繞

らむか、海は、島嶼に圍繞せられて、波浪の靜なること、
 恰、鏡面のごとく、路は、忽、極るが如くにして、忽、また
 開き、島轉じ、海廻りて、また、その盡くるところを知
 らざらむとす。宜なり、歐・米人の、これを激賞して、世
 界の絶勝と呼ぶや。志賀重昂——日本風景論

絶勝

一一、自然の音楽

聲の調子に、一定の高低ありて、節面白く、鳴り響
 くを、音楽といふ。琴・笛・三味線・ピアノ・オルガン・唱歌
 などの音曲は、通例いふ所の音楽なり。

音曲

人爲

胡弓

されど、かかる人爲の音樂の外に、自然の音樂とも、いふべきものあり。鶯・雲雀・松蟲の聲など、これなり。其の他、心を留めて、萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に、美しきまらべはあるなり。鶏も歌ひ、鳥も鳴く。雀・雲雀・山雀など、百鳥の聲、皆、音樂なり。鳶の、高き天に歌ひ、鳩の、低き梢に鳴く、これも、また、音樂なり。ある鳥の音は、笛の如く、ある鳥の音は、琴の如く、また、ある鳥の音は、胡弓の如し。

ひぐらしの聲に、夕日沈めば、松蟲・鈴蟲・機織こほろぎなど、鳴き出づ。或は、金の板を叩くが如く、或は、

音色

銀の鈴を振るが如し。蛙・蟬・蜂など、皆、それぞれに、樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も、各、その音色を異にす。或は、琴の如く、或は、笙の如く、或は、箏・箏の如し。

水の音樂は、更に、面白し。泉の水の湧き出づる音は、琴・尺八・ピアノの曲とも、聞くべく、落葉をくぐる細き流の聲は、琵琶・月琴の調にも似たり。軒の雨垂を、豆太鼓の音に喩へむか、瀑布の、どろどろと、落つるは、大太鼓の響にも喩ふべからむ。ただ、彼の大海の波の音のもの、すごく、勇しきに至りては、また、譬

ふべきものなし。(坪内雄藏)

貧民窟

一一、マリブラン女史その一

ロンドンの貧民窟と呼ばれたる、町はずれの、あやしげなる破家の一間に、母と共に住める、一少年あり。名を、ピールといふ。もとより、貧しきが上に、母は、長く、病床にありて、起臥も、自由ならず。わが身は、まだ、幼くて、何の職業に就かむよしもなかりければ、家道、日に、衰へゆきて、今は、いかにもすること能はざるに至れり。されど、ピールは、これを、苦しと

家道

快復

錢(弔)

枕頭

思はず。まめやかに、母の看護を怠らで、ひたすら、その快復を祈れり。

今日は、はや、一錢の貯もなくなりぬ。ピールは、朝より、一片のパンをも味はで、母の側にあり。病、少し、ひまありと見えて、母は、今、安き眠に入りぬ。ふと、見れば、枕頭の薬、既に、盡きたり。わが飢は、ともかくも、母に進むべき薬を、いかにせむと、思へば、ピールは、いとど、心細さの、とどめ難きを覺えぬ。

ピールは、涙ぐみながら、立上りて、窓に倚りつつ、外面の方を眺め居たりしが、やがて、かなたより、旗

女史

さし上げ、喇叭・太鼓を囃し立てつつ、音樂會の廣告を、ふれ來る者あり。聞けば、マリブラン女史といふ、當代に名高き唱歌師の、今宵、さる處にて、新曲を歌ふべしといふ、廣告なりけり。

ここに、ピールは、ふと、去年、マリブラン女史の歌ひし、ある小歌の一枚摺が、何萬枚ともなく、賣れ行きしことを、思ひ浮べぬ。ピールは、物心のつきし頃より、はやくも、音樂のたのしみを覺えて、はては、何とも分かぬ小歌など、折折、作り出でたる事もありしが、この頃も、母の病床に侍して、看護のかたはら、

小歌

書肆

一の小歌を作りいだせり。ピールは、今、その小歌を見つつ、あはれ、もしも、これを、かの女史の歌ひくれなば、書肆も、争ひて、買ひもやせむ。志かあらば、母の薬も、心にまかせ、われも、また、飢を醫することを得む。女史には、もとより、一面の識もなけれど、ひたすらに、請ひ願はば、などか、許されぬことのなからむと思ひせまりては、子供氣の、なかなか、とどめむよしもなく、急ぎ、筆を走らせて、わが小歌を書き改め、やすらかに、眠れる母に、默禮モウレイしつつ、街頭に出で行きぬ。

一面の識

默禮

刺

一三、マリブラン女史その二

マリブラン女史は、とあるホテルの一室に、憩ひ居たりしが、見も知らぬ幼童の、訪れ來て、刺を通ずるあり。見るから、愛らしき、十歳ばかりなる幼童、臆する色もなく、靜に、女史の前に進みて、一禮せり。かくて、彼は、ほがらかなる聲にて、「わが母は、久しく、病みわづらひて、今は、藥を買ふべき錢すらも盡きぬ。このはかなきわれらを憐み給はば、願くは、御身、この歌を歌うて給はらずや。さらば、われは、書肆に頼

聲(声)

默讀

み、一枚摺となして、それを賣りあるかむと、思ふ」とて、一枚の紙の卷きたるを出しぬ。

女史は、そと、そを取り上げて、默讀し居たりしが、やがて、驚けるおももちにて、ピールの顔を、うちながめ、「こそ、そなたは、作れりとや」と、いひぬ。さて、幾度か、讀みかへしつ、「こは、まことに、見事なる作なり。わらはは、今宵、必、こを歌ふべし。そなたも來りて、わらはの歌ふを聞かれよ」と、いへば、ピールは、うなだれて、「そは、嬉しけれど、母の、一人にてあらむが、いとほしくて」と、いふ。母君の方へは、わらはは、より、ものな

れたる看護婦を送るべし。心おきなく來よとて、女史は、なにくれと、勞り慰め、若干の金子と、音樂會の入場券とを與へしに、ピールは、夢かとばかり、うち喜び、母にささぐべき藥、食物など、買ひ集めて、家に歸りぬ。

幔幕
反映

今日の事どもを、母と語らふほどに、やがて、看護婦も來りしかば、ピールは、音樂會へと、急ぎぬ。まばゆきばかりに、みがき上げたる舞臺に、金絲の幔幕、張り渡したるが、さまざまなる電燈の光に輝きて、その間に立ち雜れる、人人の衣服の上に反映せる

など、かかることに眼なれぬ。ピールは、ただ、驚くより外のこともなし。

演奏

幕の開くとひとしく、賑なる奏樂、始れり。數番の演奏終りしのち、マリブラン女史は、拍手の聲に迎へられて、靜に、場に上りぬ。ピールは、思はず、慄ひ始めぬ。女史は、一禮して、徐に、歌ひ出せり。そは、まことに、ピールの歌なりけり。高く、低く、緩く、急はやく、あはれに、移りゆく唱歌の曲のゆかしさ、満場、さながら、水を打てるが如く、聽衆の眼には、いつか、涙浮びぬ。曲は、終れり。満場、なほ、寂として、人なきが如し。やがて、

水を打つ

拍手の聲、雷の如く起れり。

ピールは、會場を出でて、家路に向ひしが、ただ、空
ゆく心地して、蹈む足すらも、さだかならず。一時は、
書肆の事をも、思ひ浮べねば、又、母の事をも、うち忘
れたり。あまりの嬉しさに。

翌朝、マリブラン女史は、ピールの家を訪れ來り、
昨夜の歌をば、ある書肆の、三百磅ぽんに買ひたりとて、
その金子を、ことごとく、與へぬ。母は、ただ、涙の外に、
謝することばもなかりき。

ピールは、長ずるに従ひて、ますます、作曲の妙を

磅

作曲

航海

得のち、遂に、名高き作曲家となれり。マリブラン女
史の、ロンドンにて、病みて死なむとせしをり、始終、
その枕邊にありて、兄弟も及ばぬ、看護をつくしし
は、このピールにてありきとぞ。中等國語讀本

一四、アメリカ行の話

このたびの航海は、なにしろ、海外への、はじめて
の航海で、殊に、その乗船である、咸臨丸といふは、當
時でこそ、立派な、軍艦であつたけれど、今日から見
れば、まことに、ちひさなもので、それに、石炭は、ただ、

出帆

港の出入に、焚くばかりで、航海中は、すべて、風に依
頼する外はないといふ様な始末であつたから、一
行の人人も、何となく、おぼつかない様な氣が志た。
かくて、萬延元年の正月に、いよいよ、品川沖を出帆
して、まづ、浦賀に寄り、それから、航路を北へ取つて、
次第次第に、太平洋へと、乗りだした。

甲板
舩船

ところが、毎日の暴風雨で、乗込員の困難といふ
ものは、それはそれは、何とも、いひ様がない。船は、非
常に傾き、甲板の上にある舩船は、激浪の爲に、洗ひ
去られ、今にも、沈没しはせぬかと思つたことも、幾

度であつたか知れぬ。志かし、幸にも、一行、恙なく、漸
三十七日目に、サンフランシスコに到着すること
が出来た。

懇篤

至れり盡せ

港に著くといふと、アメリカ人は、すぐ、やつて來
て、さまざまに、歡迎するのみか、その手當の懇篤な
こと、まことに、至れり盡せりと、いふべきほどであ
つた。やがて、上陸して、諸所に案内せられ、製造場、機
械場など、所謂、文明の利器の、活潑な應用を參觀し
たが、これらの事は、多少、書物の上で、讀んで居たか
ら、その盛況に、感心は志たものの、あまり、驚きも志

好尚

なかつたが、唯、はじめて見、はじめて聞いて、驚いたのは、その衣・食・住の好尚の、甚しい相違であつた。

招待

ある日の事、一行は、サンフランシスコの市から、招待を受けた。行くと、やがて、ホテルへ案内せられた。

不慣

た。ところが、こちらは、萬事、不慣で、まあ、あの馬車の

様なものでも、はじめて見た時には、頗、驚いた。車があつて、馬が附いて居るから、乗物といふことは、分りさうなものだが、それが、なかなか、何とも、考がつかない。すると、戸を開けて、こちらへはいれと、いふともかくもと、はいつて見ると、やがて、車は、勢よく、

贅澤

驅けだす。なるほど、これは、馬が挽く車かと、察した様な始末である。それから、ホテルに著いて、上へあがると、いつばいに、毛氈を敷きつめてある。その毛氈というたら、日本では、よほど、贅澤なもので、一寸四方いくらだとかいうて、珍重する品である。それを、十疊も、二十疊もあらうといふ、おそろしい廣い、室内に敷きつめて、その上を、平氣で、靴で、歩いて居る。われわれは、大小をさして、麻裏草履を穿いて居たが、このまま、この上を歩くのはと、一時、ためらうたが、皆が、靴で、平氣で歩いて居るから、こちらにも、草

大小

履のまま、まづ、上つた。すぐ、酒が出る、徳利の口をあけると、おそろしい音が志た。變なことだと思つたが、これが、即、シャンパンである。すると、盃サカスのなかには、何か、浮いて居るものがある。分らないも、無理のないこと、三、四月の暖氣の時節に、これが、氷であらうとは、とても、思ひも寄らぬ話である。ともかくもと、一口飲んで、更に、コップに浮いて居るものを、口の中に入れたが、一同、皆、その冷たさに驚いて、吐き出した。ところが、あとで、やつと、氷といふ事が分つて、大笑を志たと、いふやうな態ヤマであつた。

磊落

戰戰兢兢

まあ、かういふことは、數限なく、あらはれて來て、日本を出るまでは、あつばれ、天下獨歩、眼中人なしと、威張つて居た、磊落書生のわれわれも、ここに至つて、意氣頓に、銷沈して、かり志たら、笑はれはすまいか、かり志たら、恥にはなりはすまいかと、ひたすら、行儀をのみ慎んで、戰戰兢兢として居たので、なかなか、苦しいとも、をかしいとも、いひ様がないほどであつた。(福澤諭吉—福翁自傳)

一五、京城

山河形勝

京城は、一に、漢城とも稱し、李朝、建國五百年來の都府、皇城の在る所にして、山河形勝の地なり。北に、白岳・鷹峰を負ひ、西北に、仁王山を仰ぎ、東に、駱駝山を受け、南は、木覓山に面す。木覓山は、一に、南山と呼ばひ、白岳の連峰は、一に、北漢山と稱す。川は、市街の中央を貫流して、漢江に注げり。その周圍五里餘、繞らすに、高さ十尺乃至二十尺の城壁を以つてし、八箇の城門を設く。方今、戸數四萬餘、人口、約二十萬に達せり。

市街は、中・東・西・南・北の五署に區劃し、中署を八坊、

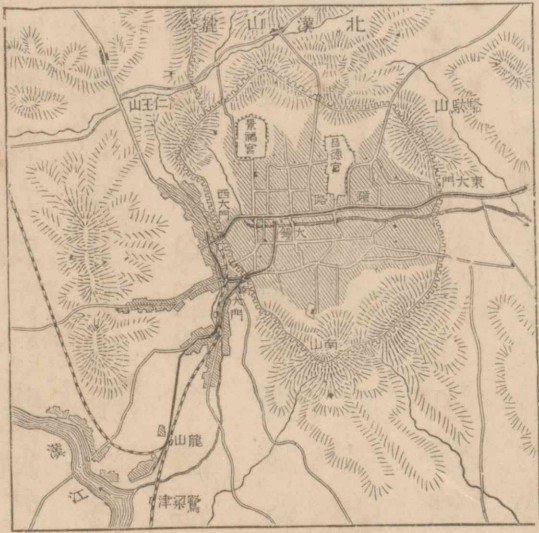
貫流

井然

矮陋

目貫

東署を七坊、西署を九坊、南署を十一坊、北署を十二



坊に小分し、各坊亦分れて、すべて、三百四十契となり、市區井然たり。されども、道路は、不潔に、家屋は、矮陋にして、觀るに足らず。唯、東大門より、西大門に通

ずる街路と、南大門より、鐘路に到る街路とは、幅十間、乃至二十間ありて、これぞ、京城の目貫とも稱す

べき處なる。

中にも、この兩大路の相接する處、所謂鐘路は、最繁華を極む。其の鐘路と稱するは、辻の東南隅に鐘樓あり、これを普化閣といひ、その中に、高さ一丈餘、周圍二丈餘の巨鐘を懸けたるを以つてなり。往時は、日没の後、南山の烽燧、八道、事なきを告ぐるや、この巨鐘を撞きて、同時に、四方の城門を閉づ。これを人定と稱し、これより以後は、男子の外出するを、禁ずる制なりしが、今は、その事なくして、唯、晝夜とも、十二點の時を告ぐるのみとなれり。

烽燧

人定

商業は、毎朝、南大門・東大門などの内に、市場を開きて、穀類・魚類・肉類・野菜類等を商ふ外は、多くは、この鐘路に於いて行はる。鐘路には、絹・木綿・苧・麻・紙類・乾魚・鹽・魚等を鬻ぐ、常住の老舗ありて、賣買、盛に行はる。これらは、皆、政府より、專賣權を得たるものにして、其の他の者にして、これを鬻げば、家屋は沒收せられ、且、獄に下さる。故に、これらの商品を賣買せむとするものは、免許料を納めて、その組合に加盟する外なしといふ。

老舗

沒收

加盟

夙起

試に、夙起して、南大門の市場に到らむか、白衣の

籠(籠)

土人は、廣き道路を填めて、魚類を販ぐ者あり。野菜を陳列せる者あり。扇形の籠に入れたる、鶏を負ひて、立賣する者あり。長き烟管を啣へながら、立ちて、見物するものあり。松枝を、牛背に載せて、高やかに、呼びつつ、牽き行く青年あり。頭上に、水壺を戴きて、群集を分けゆく婦人あり。電車は、鐵路を馳せて、此の群集中を、頻繁に、來往し、その雜沓、名狀すべからず。(韓國寫真帖に據る)

一六、支那人の長所

名狀

短所

長所

わが邦人、好んで、支那人の短所を説く。されど、その長所に至りては、多く、これを知らざるもの如し。余は、彼等の長所につきて、學ぶべきもの、決して一二に止らざるを見るなり。

余の、第一に、支那人に敬服するは、その信用を重んずること、是なり。彼等は、數萬圓乃至、數十萬圓の取引をも、ただ、一片の口約にてなすなり。夫かして、その渝らざること、確として、實に、山岳の如きものあり。この一點に於いては、さすがの英國商人も、爲に、舌を捲きて、驚けりとぞ。嘗、一たび、足をホンコン

口約

鞏固

に入れしものは、皆、その地に於ける、支那商人の勢力の、いかに盛なるかを、説かざるものなし。夫かして、その重なる原因は、その商業的信用の鞏固なるにあること、亦、具眼者の、常に、言ふ所なり。

犠牲

支那人の忍耐力の強きは、更に、驚くべきものあり。彼等は、實に、幾多の勞苦に耐へ、幾多の歲月を犠牲にして、遂に、よく、瘦地として有名なりし、かのシ
ンガポールをば、今の鬱蒼たる菜園に、化し去りしに、あらずや。かくの如くにして、彼等の忍耐力は、時として、造化の力を奪ふことあり。その、遠く、異域の

異域

寂寥茫漠

地に入りて、殆、人跡の到らざる、寂寥茫漠の地に、さびしき草庵を結び、土地を拓き、牛羊を牧し、果樹を植ゑ、以つて、その貨殖の道をはかり、十數年の長きにわたりて、少しも、倦む色なく、悠然として、自得する忍耐力に至りては、到底、他の國民の、企て及ぶところにあらざるなり。

貨殖

保障

支那人は、また、その團結力、頗、固くして、互に、協同の保障をなす美質あり。總じて、支那人は、いづこにても、行かざるところなし。かくて、かれらは、いづこに行けども、決して、孤立せざるなり。彼等は、必、その

孤立

制裁

合すれば強
をなす
實踐

同種類の業務を通じて、互に、相協同し、その整備したる組合の、嚴重なる制裁の下に、活動するなり。合すれば、強をなすと、いふ眞理は、彼等の、實踐して、その利を收めつつあるところのものなり。

その他、彼等が、物に精細なるが如き、節儉なるが如き、勞苦を事とせざるが如き、志かして、いかなる場合にも、冷靜に、物を打算するが如き、その終極の目的の爲には、いかなる屈辱をも辭せず、いかなる危険をも、あへてするがごとき、みな、争ふべからざる、彼等の長所にして、わが邦人の、つきて學ぶべき

冷靜
打算

辭(辭)

ところのものなり。(徳富猪一郎)

一七、格言

一、一年ノ計ハ、穀ヲ樹ウルニ在リ。十年ノ計ハ、木ヲ樹ウルニ在リ。百年ノ計ハ、人ヲ樹ウルニ在リ。(管子)

一、人ノ、滿チ貪ル者ハ、禍多ク、ソノ、約チ守ル者ハ、福多シ。(五代史)

一、信言ハ美ナラズ。美言ハ信ナラズ。(老子)

一、太山ハ、土壤ヲ讓ラズ。故ニ、能ク、ソノ大チ成

シ、河海ハ、細流ヲ擇バズ。故ニ、能ク、ソノ深キヲ
就ス。(史記)

一八、龍華寺の富士

龍華寺は、久能山を去ること、一里有餘、不二見村、
字村松といふところにあり。近きころ、ある僧の、こ
の處の風光をよろこびて、かりそめに、庵を結びし
より、その名、頓に、世に聞ゆるにいたりきとぞ。馬琴
が、玄同放言に、大約、士峰の眺望は、駿河國有渡郡龍
華寺の庭より觀るを、第一とすべしとあるも、やが

大約

て、ここをさせるなり。

玲瓏

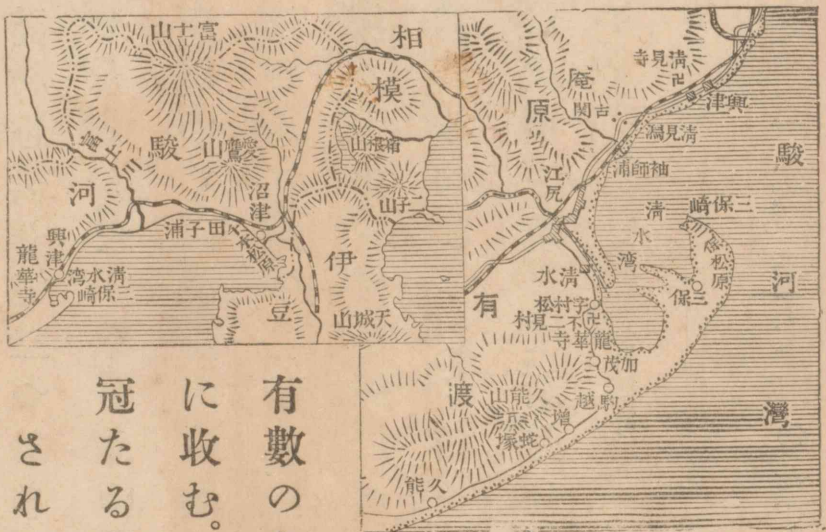
目睫

そも、龍華寺の地たるや、程近き、清水灣を隔てて、
玲瓏たる芙蓉峰の八葉、高く、翠天を捧ぐるを認む。
愛鷹箱根二子天城の群嶺は、その右麓に侍衛して、
興津袖師浦田子の浦千本松原など、さながら、目睫
の間に在り。みぎには、三保の松原、波の間に、綠を
浮べて、左には、清見瀉の古關、見る人の心をとどめ
ぬ。江の面には、大君のみつぎを運ぶ蟹船、楫もほさ
ず。あるは、姿横たふる富士の嶺の雪に棹さし、ある
は、底に沈める三保の浦松の綠を分けつつ、漁歌、互

冠たり

に、答ふるさまいと、心ありげなり。
 世に、富士の嶺を望むところ多かれど、あるものは、あまりに、遠くして、有るか無きかの姿、おぼおぼしく、あるものは、間近きに過ぎて、却つて、雲霧のなげき絶えざるを、此處は、中らの程を得たり。これ、龍華寺の眺の、天下に冠たる所以の一なるべし。
 また、世の名所、水によしあるは、山の方おくれ、山の眺すぐれたるは、水の心ばへ劣れるが、習なるを、ここは、海山、二つの景色を具へて、上下、ことごとく、畫圖なり。これ、龍華寺のながめの、天下に冠たる所

雙眸



以の二なるべし。
 また、世の勝地は、大概、一つの名所に限りて、二つ、三つを兼ねたるは少きを、此處は、清見湖・三保の崎・田子の浦など、天下有數の名區を聚めて、唯、雙眸の中に收む。これ、龍華寺の眺の、天下に冠たる所以の三なるべし。
 されば、四方の景物、ことごとく、

夕陰

夕陽

海角

詩材を供して、二つなきながめはつきねど、夕陰の、
 やうやう、去げくなりゆかむとすれば、顧みがちに、
 別れゆくに、夕陽山の端に、殘影をどとめて、又、たく
 ひなき江山の名殘を、惜むに似たり。加茂駒越増蛇
 塚などの村村を経て、わが、久能に歸りし頃は、海の
 音のみ暮れのこりて、一村、暮靄の底に去づやかに、
 漁火浪を燒きて、新月の影、まさに、海角をはなれた
 り。
 (武島又次郎 覽裳微吟)

一九、富士山の頂上

旭日の影

層雲

心機

東雲の空、ほのぼのと、明けゆくままに、うちなが
 め居れば、箱根・足柄の裾をまとひ、寶永の頂に懸れ
 る白雲は、かき消すやうに失せて、やがて、中空に、紫
 雲たなびき、海面に漂へる、一帯の層雲は、黄金色を
 帯び、御光、燦然として、蒼天を貫くかと、見る間に、や
 をら、旭日、團團として、天に朝する光景は、さながら、
 天の岩戸の古事も、思ひ出でられて、眼眩み、心機、天
 外に馳せて、こよなり、うるはしく、尊く覺ゆ。

風伯の怒

犬牙錯雜

頂は、風吹かぬ日としてはなし。剩さへ、その力なみならず強ければ、山の懷を掠めて、吹きあぐる音宛、遠雷の如く、觀測所の附近に、犬牙錯雜せる巖を衝いて、碎け散る聲は、いとものすごく、その餘勢、噴火口を襲ひて、坑底に吹きおろす響は、瀑布の傍に立つが如く、怒濤の岸をうつにひとし。かかる折ふし、丑三つ時の、戸外の觀測のおそろしさ、いふばかりなし。

下弦の月

風伯の怒れる折の怖ろしさも、さることながら、

突兀

巖(岩)

下弦

地獄

風なき夜半の山頂こそ、物すごき限なれ。突兀たるあたりの巖は、惡鬼の、われを襲ひ來るか、と怪まれ、黒暗暗たる大噴火口は、今しも、われを吞まむとて、待つものの如し。かかる折から、下弦の月、銅色を放つて、巖頭にかかれる光景は、實に、地獄のさまも、かくやとばかりにて、身は、さながら、劔の山とやらむに、さまよひぬる心地して、凄じとも、すさまじ。

山のあるじ

十月十三日、東西にまします父母の御許に、つづがなり、頂上に著きにしよしを認めて、吾を送り給

義弟

へる義弟清殿に、ことづて參らせしに、清殿も、いつ、果つべき名残ならねばとて、何くれと、御心を盡し、「さらば、滞とどなり、事を遂げさせ給へ。いざ」とて、立ち出で給ふ。やがて、姿は、いはほの蔭にかくれて、見えなくなりぬ。それよりは、さしも廣き富士の頂に、良人と、われと、二人の外には、禽獸ちんじゆすら、あらずなりぬるにつけて、「兩人こそ、今より、富士のあるじなれ」と、互に、思ひ慰めてしことの、心に浸みて、今も、富士を見るたびに、わが物の心地ぞせらるる。

下界の音信

良人

神無月

剛力

喃喃

名に高き、千島の國の報効義會員兩名、神無月二十八日といふに、郡司大人の仰をうけたまはり、御文と、數數の贈物とを、剛力に負はせ、氷雪を冒して、訪ひ給ふ。正午の頃にやありけむ、外面に、喃喃と、戸を敲く音す。また、例の風にやはからるるとて、うちすましてありけるに、やがて、あやしげなる聲して、「見舞の者こそ參りたれ。此處、明け給はずや。寒氣に、え堪ふべくもあらず」と、いふに、いたう、驚かれて、馳せ出でたれども、門口は、氷に閉されて、戸のあくへきやうもなし。せむ方なく、内外、力を合せて、窓の戸

引放ち「口狭ければ、去りへより、ゐざり給へ。氷に傷つかせたまふな。徐に、せさせ給へ。見たまふ如く、今は、はや、七日あまり、氷雪にとぢられ、外面に出づることえならねば、年内は、もはや、下界の音信を得むこと、思ひもよらずなど、打語らひつる折から、眞に、思ひもかけず、訪はせ候ひつる事、こよなきよろこびにこそ候へ。嶮しき山路に、さこそ、勞れたまひつらめ。狭くとも、今宵は、此處に」と、この夜は、よもすがら、文、幾通となく認めて、故郷の方方に贈らむとす。實に、思はざる外の便を得つることの嬉しさ、いひ

爲(為)

出づべき言の葉もなし。方方は明くる日の正午頃には、はや、此處を立ち出でたまふと聞きて、郡司大人に、文かき參らする端に、

わが爲に、はるばるとはせ給ひつる、
心おもへば、なみだのみして。

方方の姿を見送りて、良人も、

わが國の、北の志づめとなりぬべき、
ますらたけをの、身を守れ神。

(野中千代子)

大泊
(コルサコ
フ)

蕞爾

二二〇、海豹島

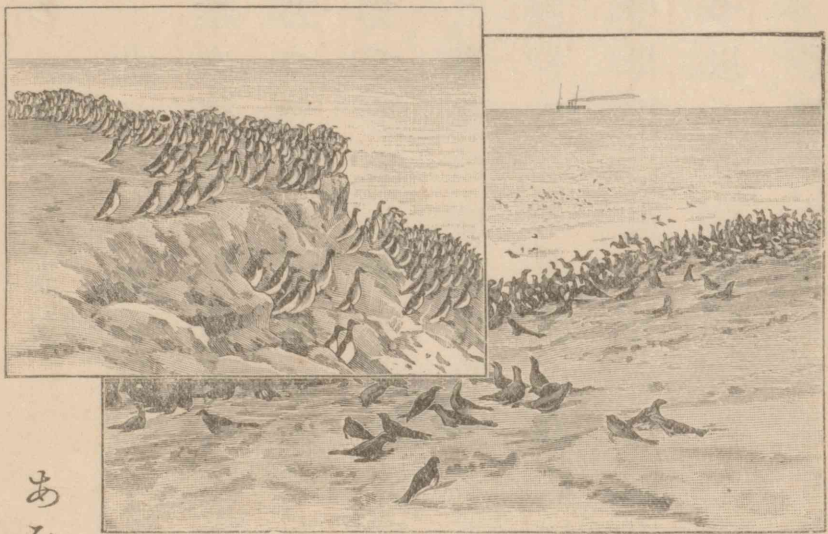
海豹島は、大泊支廳の管區に屬し、多來加灣の東を限り、北緯四十八度三十一分、東經百四十四度四十三分に位す。其の長さ七百米、幅七十米、高さ四十餘呎あり。沙濱によりて圍まれし、蕞爾たる、テール状の一岩礁に過ぎず。

されば、島中、一水の湧出するなく、且、土壤なければ、樹木生ぜず。只、沙濱少許の地に、エゾチグルマ・ハママギ等を見るのみなり。

此の地は、膾炙膾の保護地として、世界中、稀に見

注目

雜然



る所なれば、水産業者の、注目を惹くこと、大なり。明治四十年の如きは、膾炙膾の親獸二千三百餘頭、仔獸一千三百餘頭、雜然として、本島の東岸、沙濱の地に集合し、或は、海面に游泳し、或は、陸上に匍匐し、牝牡相嚙み、親子あひ戯れ、そのさま、眞に、本島

極樂淨土

の一奇觀なりき。

此の獸は、夏季は、かくして、本島の極樂淨土に、光陰を經過し、秋季、寒冷の季節に入るや、ことごとく、去つて、南方、本州の東岸、金華山、犬吠岬、房州附近にまで、游泳し來り、或は、獵者の毒手に斃るるあり、或は、海獸の口腹に葬らるるあり、幸に、其の難を免れしもののみ、來春、再、本島に復歸し、ここに上陸するや、母獸は、直に、分娩し、爾來、其の兒を哺乳撫育しつゝ、以つて秋季に至るなり。

哺乳撫育

該獸の、本島に來るものは、往時においては、其の

毒手

施設

數、甚、多く、一年、一萬五千頭を捕獲せしことありきと、云ふ。我が政府は、露國の施設を繼承し、該獸の保護に従事せるを以つて、蓋、數年ならずして、其の成績の、大に、觀るべきものあらむ。

散在

尙、此の島には、數十萬の海鳥、群集し、その鳴聲の喧しきこと、耳、これがために聾せむとす。且、無數の卵の、岩上に散在するを見る。これも、亦、一奇觀たるを失はず。(樺本地誌)

二一、草花

雷

秋の雨寒し。萩は、少しづつ、咲き出でたるが、露に、半、埋れたる様、えも言はず。前なるは紅、後なるは白、相雜りて、地に敷かるるは、今、十日の後なるべし。

蕾、なほ、緑なる女郎花は、筆の如き、初穂の薄と、丈較べして、力なき雨に、打揺めく。夕の嵐を知らず顔なるも、望は遠し。葉雞頭の、獨、抜け出でて美しき、散りもせず、萎みもせず、濡れて、愈、色添ふを覺ゆ。

主人は、花鋏持ちて、庭に下りぬ。剪らるるは、萱か。紫苑か。垂れかかる萩は、少女の手に、とらへられぬ。その下蔭より、水引の花は、見出されぬ。つめたき雫

花鋏

は、主人の顔を打ち襟に傳ふ。天和田建樹—雪月花

二二二、秋蟬 (天町芳衛)

園にひと夏、鳴きくらし、

聲もよわれる、うつ蟬の、

力もなげに、すがれるを、

ねらふ童兒の、うたてさよ。

蟬はかなしき、音にいてて、

やよや童兒、今去ばし、

見逃してたべ、我がいのち。

心のかぎり、鳴かしめよ。

つらき野分の、風たちて、

露は去げくも、置きにけり。

残る日影の、消えゆかば、

やがて終らむ、我がいのち。

(擬人法)

二三、暴風見舞の文

昨夜の大あらし、いかがいらせられ候ひしか。やうやく、雲をさまり、日影さし出づるを見候うて、少し、胸志づまる心地致し申し候。さてさて、近頃にか

平家 損處

ぼえぬ、大あれに候ひしかな。手前かた、屋後にありし栗の木二本は、根を倒ころにして、仆たれ居り候。風筋は、いかなるにて候ひしか、ただ、西より、北より、南より吹きまはすかと思ふやうにて、家のうちには、舟にありと、同じやうにたぼえ候ひき。さりながら、私方は、平家造のうへに、地所も低く候へば、さしての障なく候へども、貴方様は、高臺の御二階作なれば、いかに、當て候ひつらむ。塀垣などの御損處もあらせられずや。氣づかはしく思はれ候ふまま、御伺ひ申しあげ候。かしこ。

同 返事

早速御人にて、御たづねいただき、有りがたく候。仰のとほり、昨夜は、生きたる心地も志候はず。戸障子のきしむ音は、塀垣のたふる響に合ひて、屋根も、柱も、引きぬきもてゆかる事と、覺悟をきはめ申し候ひき。折から、主人は、昨日の土曜よりかけて、一夜の旅に、近郷の秋を探りにと、出で申し、留守は、老人と、女子ばかりゆゑ、いかがせましと、つひに覺えぬ、おそろしき心地いたされ候ひしが、追^追追、出入のもの集り、家には、支木をし、屋根には、物を置きな

覺悟

近郷

満足

ど、かひがひしく致しけれ候ひしかば、それに、少し、心強くなりて、あけ方よりは、物覺ゆるやうに、相成り候。今朝、見候へば、仆れしは、まはりの塀と、垣ばかりにて、門前の長屋も、うらの物置も、破損と申すほどの處なく、さては、驚の方おびただしかりしかと、我ながら、をかしく存じ候。御宅の栗の木も折れ候ひし由、惜しき事あそばされ候。私かた、柿の實、ことごとく、落ち候うて、中には、疵つきたるも多ければ、少しも満足なるをと、選りて、御子様がたの御慰に、さし上げ候。くれぐれ、御同様に、事なく濟みつるは、

禮(礼)

何よりに御座候。御家族皆皆様へ、宜しう、御禮願ひたく候。かしこ。(種口夏子)

二四、魚とイソギンチャク

魚類には、奇麗な體色を志たものが、いくらかもあることは、誰でも、知つて居ることでありすが、海の魚には、奇麗なものが、多い。熱帯地方の海岸に、多くある、珊瑚礁に棲んで居る魚には、何とも、いひ様のない、奇麗なものが、ありますが、その中に、スズメダヒに近い種類で、殊に、奇麗な小魚と、イソギンチャク

珊瑚礁

位置

共棲

干潮

と、一緒に、生活して居るものがあります。それは、脊椎動物と、腔腸動物といふ、大層、位置の違つたもの同志の、共棲であるから、最、面白いのであります。この事を發見したのは、ドクトル、スル―テルと云ふ人で、處は、熱帯の、バタヴィア灣でありますが、此の人の申しますのには、

「バタヴィア灣内の小島にある珊瑚礁で、干潮の時には、水上に、面を現す様な處の、珊瑚の死殻の上に、大なイソギンチャクが、甚、多く居ますが、其の體は、薄桃色で、澤山にある觸手は、薄い黄色と、紫

色で、實に、美觀であります。

ところが、此のイソギンチャクの中で、殊に、大きくて、口盤の直徑が、一尺二寸以上もあるものの、觸手の間に、大概、二匹、乃至、四匹ぐらゐ、小さな、綺麗な魚が、さも、愉快さうに、棲んで居ますが、其の大きさは、一寸六七分位で、其の體色は、橙黄で、三本の黒色の縁のある、太い銀色の帯が、斜に付いて居て、鰭も、白色で、黒い縁があるから、其の奇麗なところ、譬へ様もありません。注意して、その泳いで居るのを見ると、刺針で充滿して居る、實に、危険な、

橙黄

充滿

觸手の間を、すこしも、構はずに、運動して居て、時には、その體が、靜に、觸手に觸れることもありますが、すこしも、刺される様なことは見えません。それで、試に、匙の様なもので、魚が觸れる様に、極靜に、イソギンチャクに觸れて見ると、觸手は、少しも、これに抵抗しないで、靜にして居ますが、少し、強く、觸手に觸れると、直に、これに觸れたものを、掴み取らうと志ます。

此の小魚が、イソギンチャクの觸手の間に棲んで居て、何の益があるかと云ふと、全く、觸手の刺

請合

針のお蔭で、他の、大な魚類に、食はれない爲であります。試に、小魚を、これと、同じ處に棲んで居る、大い魚と、一緒にして、水槽に入れて見ると、小魚が、大魚の食となることは請合で、小魚は、水槽内を、あちらこちら、泳ぎ廻つて、匿れやうとして、珊瑚であらうが、ウニの棘の中であらうが、何でもかでも、水槽内にあるものの蔭に、はいらうとするけれども、逃げ延びる事は、到底、出來ないで、大魚の食となるのであります。

到底

志かるに、同じ水槽の内に、前のイソギンチャク

始終

を入れてやると、大魚が居つても、小魚は、六箇月以上も、生きて居たことが、幾度もありますが、これは、全く、イソギンチャクのお蔭で、其の水槽の内にある時には、小魚は、始終、これに寄り附いて居ること、まるで、子供が、母親を慕つて、その傍に附いて居るのと、同じやうで、食物とするものを、追つかける時ばかりは、これを離れるけれども、これを捕へると、又、すぐに、イソギンチャクの傍に、歸つて來ますが、また、手でも、何でも、水の中へ入れて見ると、小魚は、すぐに、觸手の間に逃げ込むの

親友

は、實に、不思議でありまして、珊瑚にくつついて居るイソギンチャクを、これと一緒に、水中から取りあげると、小魚は、その親友のイソギンチャクに別れるより、いつそ、死んでしまふ方がよいと、云ふ様子で、決して、逃げやうと志ませんのは、一層、不思議であります。それゆゑ、イソギンチャクさへ取れば、此の小魚は、すき自由に、いくらでも捕れます。

この魚は、右のやうに、イソギンチャクに、大層、保護されて居るのでありますが、イソギンチャクは、其の

返禮

かはりに、何をして貰ふかと、云ひますと、其の返禮は、食物です。すなはち、小魚は、他處から、食物を捕つてきて、イソギンチャクに食はせるのであります。志かし、魚も、亦、その捕つて來た食物を、皆、イソギンチャクに、遣つてしまふのではありません。其の捕つて來た食物を、イソギンチャクに啣へさせて置いて、これを、その片端から啄むので、つまり、魚は、外に出て働いて來、イソギンチャクは、内に居て守ると、いふのであります。石川千代松—動物の共棲

二五、瓜哇航路

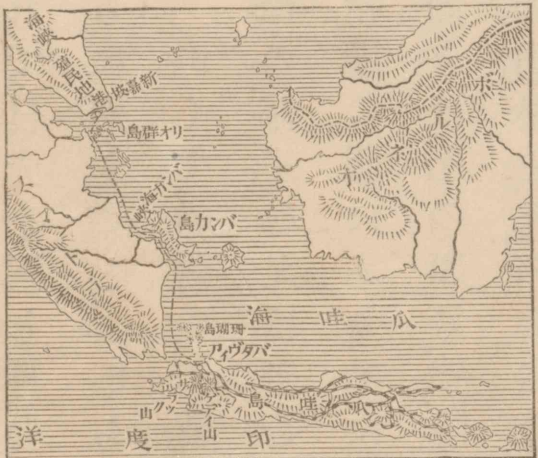
宛然
動搖
淋漓

風景畫くが如き新嘉坡港を發し、南に向つて航すれば、船は、幾許もなく、リオ群島の間に入らむ。無数の小島送迎し、宛然、我が内海を行くが如し。これよりして、絶えず、スマトラの近海を通過するものなるが、平常、海面、極めて、靜穩にして、更に、風波の憂あらず、毫も、船體の動搖を感ずることなし。シンガポールを、午前に發すれば、日没頃には、既に、赤道を横ぎり、南半球に入るべし。暑氣、甚しきを以つて、船室に入れば、流汗、淋漓として、堪へがたけれども、船

随意

燐光

内には、常に、冷水浴の設ありて、何時にても、随意に、入浴することを得べし。すべて、浴場、其他、食堂、甲板等の設備は、いづれも、固



有の瓜哇式にして、最能く、熱帶の航海に適し、彼の、印度航路の英船とは、全く、趣を異にせり。

夜に入れば、時として、海面に、燐光を認め、又は、遠方の雲峰より、遙に、電光の閃くを見る。日中は、常に、好

驟雨

晴なれども、層雲屢、天を覆ひ、殆、雨ふらむとし、又、晴れて、日光を漏し、再、曇り、時としては、驟雨の、沛然たるに遇ふこと、少からず。

歴歴

かくて、船路の、無數の島嶼に接近せるが故に、沿岸の椰子林、又は、鬱蒼たる闊葉樹林は、歴歴として、指顧の間にあり。殊に、バンカ海峡を通過する際の如きは、その間、最、狹隘なるを以つて、左舷には、該島の山林と、その有名なる錫の鑛業場とを、遠望すべく、右舷には、スマトラの密林、綿互して、殆、大陸の如く見え、風光、頗、美なり。

綿互

條紋

すべて、此の邊の海面は、淡綠色、或は、黃綠色にして、海水の、甚、深からざるを示し、また、水面には、往往、海蛇の游泳するを見る。體の長さ三四尺、黃褐色の條紋を有し、海波の間に漂ふ。又、時としては、夥しき、ブランクトンを見ることあり。黃褐色を呈し、廣く、海面に浮び、波浪に動搖せられつつ、幾條の帶の如く、延いて、數十町の間には達す。これ、蓋、熱帶の海面には、普通なるものなるが、亦、かも、太平洋の中央には、これを、見ることに能はずして、概、大陸、又は、島嶼に接近せる海上に於いてのみ、これを見ることを得るな

り。予は、航海中、屢、かくの如き現象を見たる中にも、臺灣海峽の北部、竝に、南支那海に於いては、ことに、多かりき。

バンカ島を過ぎて、瓜哇海に入れば、海面、頗、廣闊となり、殆、島嶼を見ず。これより、一晝夜の後、船は、次第に、バタヴィアの港頭に近づき、美麗なる珊瑚礁を、海面に望む。礁上には、椰子、及び、他の樹木を産し、頗、奇觀なり。又、陸上の方面には、一帯の沿岸、悉、高き椰子林によりて覆はれ、而して、サラック・ゲデイの兩火山は、遙に、青空に聳え、依依として、遠來の旅客を、迎

依依

ふるに似たり。三好學——熱帶植物奇觀

二六、誠實の接待ぶり

むかし、さる都に、ある夫人の、客あつかひに巧なるが、住みけり。ある時、田舎より、その友どちの、はるばると、訪ひ來りけるを、喜び迎へて、強ひて、數日の逗留をすすめ、山海の珍味を供へたるは、さらなり、夜のふすま、朝の著替に至るまで、得らるべきかぎりの華美をつくして、もてなしたり。かく、もてなしつつ、主婦は、われながら、心づかひの、至らぬくまな

逗留 珍味

華美

接待
不興

きを感じければ、いと誇らしげに見えけるを、客なる夫人は、さまで喜べる色もなく、やがて、暇を告げむとする時、數數の御心づくしは、身に志みて、うれしく受けまゐらせぬ。わが住める方は、片田舎には侍れど、年久しう、都にのみ住みなれ給ひし御身には、又、見るめ新しきふしも、おはせむ。折もあらば、音づれたまへ。わらはは、また、君がなし給ひしよりも、更に、よき接待ぶりを、心得侍るぞよ」と、うち笑ひつつ、いふ。心なのいひ草やと、思ひて、主婦は、いと、不興げに、うなづきて、やがて、別れぬ。

常食
廣言

はかなく、明け暮れて、三年にもなりぬ。都の夫人は、たまたま、旅に出でたちしが、路のついでに、彼の友どちのこと、思ひ出でて、訪ひけり。そこなる夫人は、よろこびて、出迎へ、別れて後の事ども、かたみに、心ゆくばかり、語りあひつつ、今宵はここに」と、せちに、留められて、やどりぬ。やがて、ゆふけの膳に向ふ時とはなりぬ。と見れば、一家の常食なるべし。あやしき、つまみ料理の、そのままなるを、供へたり。都の夫人は、ここなる主婦が、さきの廣言のこと、胸に浮びて、不思議なるおももちするを、主婦は、さもこそ

と、うち見やりつつ、さて、詞をあらためて、君には、よも、わが、さきの廣言をば、忘れ給はじ。わらははは、かの折、まことのもてなしぶりを知れりと、いひき。これぞ、まことのもてなしぶりなる。君よ、わが無禮なることばを、許させ給へ。さても、君の、わらはをもてなし給ひし折の、御心づかひは、如何ばかりなりしぞ。君は、まことに、數數の用意をこらし給ひき。されど、わらはは、君の親しき友としてにはあらで、見ず知らずの他人あつかひを受けしが如く、感じたり。わらはは、いま、君を迎へて、何ばかりの用意をもなし

侍らず。そは、わが心には、君を、まことの友と思ひ、はては、わがうつくしき家族の一人と、思ひまゐらすればなり。わらはは、固く、信じ侍りぬ。まことの友を迎ふる道は、隔なき心の接待にありて、さまぎまの用意にはあらぬことを。そも、君には、いかが思ひ給ふらむと、なつかしき眼に、客なる夫人を、うち見やりつつ、いひぬ。客なる夫人は、詞はなくて、うなづきぬ。いたくも、感に打たれたりけむ、そが眼には、ゆかしき、涙の珠をさへやどせり。(菰舎漫録)

二七、歸朝みやげ

出發の時は、九月の暑い盛でございましたが、丁度、四個月になります。けれども、其の間、朝から晩まで、見物に出歩きました。それはそれは、忙しういたしましたものですから、もう、一年も、二年も、經つたやうな氣がいたします。

交際の事。

彼地では、交際がさかんですから、婦人でも、度度、外出致します。志かし、その爲に、家の事が、お留守になるやうな事は、決して、ございません。何故かと、申しますに、ちやんと、規律が立つて、す

規律

秩序

手配

べての事に、よく、秩序が整つて居りますから。例へば、人を訪問すると申しましても、必、午後に致しまして、午前中に行くと、いふ事は、ございません。それで、午前中に、その日の仕事の手配をして、自分のすべき事は、去て置き、下女にいひ付くべき事は、言ひつけ、家の事が、十分、整つた上で、訪問もいたし、面會もするのですから、其の爲に、決して、主婦の務を缺くやうな、心配は、ございません。それに、日本のやうに、訪問時間が、午前でも、午後でも、構はないといふ事では、どうしても、其の爲に、家の務を缺きます。私

など、時には、まだ、朝飯もいただかない内から、訪問される事もございました。其の方が、お歸りになりますと、すぐ、引違に、又、來られました。其の日の事を、考へる暇も、下女にいひ付ける隙も、ない事がございます。

一定

これは、私一人に限つた事ではございません。同じ様に、迷惑に思つていらつしやる方が、少くはなからうと、存じますが、つまり、訪問時間に、一定の習慣がないからでございます。どうか、これは、西洋のやうに、訪問は、必、午後に限ると、いふ事にいたしました。

餘裕

いものでございます。いくら、忙しい人でも、時間を、規則的に使ひますれば、必、相當の餘裕が、出来るものでございます。不規則につかつて居ては、常に、追はれて、仕事がかどりません。日本の現今のやうな有様で、來る人毎に、逢つて居りましては、到底、家事を治むる隙がございません。それに、世間の人、は、家の事をお留守にしても、よく、人に逢つたり、外出したりする婦人を、交際家などと、申しますが、もし、交際家の意味が、眞に、そのとほりでありますなら、あまり、結構な名稱でも、ございますまい。兎に

全廢

も角にも、午前の訪問を、全廢する事は、今日に、是非、必要な事だらうと、存じます。

茶の事。

日本では、御客のある度に、お茶を出して、其の度毎に、主人も、茶を飲んで、長話をいたしますが、時間や、手数の不經濟は、もとより、お茶を、澤山、飲みますのは、衛生にも、善くありません。それで、かねてから、是は、どうか去たらと、思つて居りましたが、此の度、西洋の様子を見て、参りまして、一層、その感を、強くいたしました。彼の地では、午後四時頃に、大抵、お茶を飲みますが、丁度、その時に來合す

受け日

變(變)

か、又、一週に一度の、受け日の時でなければ、どんな御客にても、大概、お茶も、お菓子も、出しません。それで、ちつとも、可笑しくもなく、失禮でないので、ございます。用事の話が濟めば、すぐ、歸つて、日本のやうに、だらだらと、長話をいたしませんですから、大變、きまりが宜しうございます。食事などでも、食事に招いた客でなければ、決して、出しません。また、食事に招かれた時は、少しも、時間を違へずに参ります。が、これは、自分一人の爲に、他の客を待たせ、従つて、主人に、迷惑をかけてはならぬといふ、心づかひか

燈(灯)

らで、皆、時間を、甚、嚴重に、守ります。志かし、お茶に呼ばれた時は、少し位、後れる事があります。そして、其のお茶の會の時は、幾ら、遅くなつても、夜になつて、燈火が、點くくらゐの時刻まで居りましても、食事の用意など、する心配はいりません。(鳩山春子談話筆記)

二八、茶の湯と生花

精選

凡、茶を味ふに、三様の法あり。急須、土瓶などに、普通の茶を、煎じ出して用ふるを、煎茶といひ、白にて、精選せし茶を、碾きて粉とせしもの少量に、熱湯を

注ぎ、さて、かきまはし、泡立たせて用ふるを、薄茶、その、やや、多量なるに、熱湯を注ぎ、かきまはして用ふるを、濃茶といふ。薄茶、濃茶には、種種の方式あり。これを、茶の式と名づく。

茶の湯は、東山時代に始り、其の流派、甚、多し。千家、有樂、石州等の流派の中にて、最、廣く行はるるは、表裏の兩千家流なり。昔は、清雅なる娛樂の間に、禮式作法の要旨を教へて、武人の、あらあらしき心を和げ、かねては、奢侈を戒めむための遊なりしが、徳川時代に及びては、一種の、表だちたる禮式として、用

清雅
娛樂

奢侈

ひらるるに至りたり。今も、なほ、中流以上の社會に行はる。

生花は、手折りたる花を、瓶、又は、盆に移し生けて、室内の風情を添へ、床の間の飾となす法をいふ。推古天皇の御代に、聖徳太子が、花の枝を、水に生くる法を、小野妹子に授けさせたまひしに始ると、いふ。妹子は、いはゆる、池坊流の遠祖なりとぞ。池坊の外に、なほ、遠州流など、いふ派もあり。

花を生くる器には、瓶を用ふるを、通例とすれど、時としては、竹筒、砂鉢、薄ばたなど、いふ器をも用ふ

遠祖

砂鉢
薄ばた

る事あり。又、籠製の花活、竹にて編みたる、藤蔓にて作りたるなど、その種類、いろいろあり。

花の種類、及び、生け方は、いづれも、器につれて、差別あるべし。又、床の間の位置、置物、掛物の種類、庭などによりても、多少の工夫あるべきなり。

これを要するに、茶の湯の本意は、主客の秩序を正し、坐作進退の禮法を定めて、温雅靜閑を旨とす。故に、その精神に通ずることを得ば、必しも、くだくだしき儀式を、學ぶに及ばざるべし。

生花も、また、同じ理なり。強ひて、枝を曲げ、作り撓

坐作進退

流儀

めて、自然の風情を損ひたるは、醜し。なまなかに、ある流儀に泥まむよりは、手折りたるままを、投げ入れたるが、風流の本意に、かなふことあるを、忘るべからず。（坪内雄藏）

二九、足利義政の好事

武門

足利尊氏、武門に生れながら、兵馬倥傯の餘閑を以つて、畫を宅間榮賀に學び、精巧、畫師に譲らざりきと、いふ。義詮・義満・義持・義教、亦、いづれも、文藝にすぐれ、皆、畫をよくせり。その、累世、文雅の好尚あるこ

文藝

累世

風靡

と、かくの如くなりしかば、義政に至りて、多藝、好事、殆、爲さざる所なく、風流遊樂、以つて一代を風靡せるも、偶然にはあらざりけり。

泉石

されば、長祿二年、義政、新殿を室町に造り、泉石を築き、珍花・異草を蒐めて、これを栽ゑ、室内には、奇玩をつらね、食ふに、黄金・沈檀の箸を用ひ、又、その母の爲に、高倉第を造りて、善美をつくし、一本の障子の値、二萬錢を要したりとぞ。

沈檀

文明五年、將軍職を、その子義尙に譲り、東山別業を營みて、東求堂と號し、十五年、移りてここに居る。

布置

堂の東に、四疊半の茶室を作り、同仁齋と名づく。繞らすに林泉を以つてし、山に據り、野に臨み、泉石の布置、自然の妙あり。今に至りて、天下有數の名園と稱す。銀閣、その中に在り。北山金閣に倣ひ、銀を貼せむあらしなりしに、未、果さずして、薨ぜられき。

禪學
茗香

義政、禪學を好み、茗香を愛し、茶人珠光等と、公卿を會し、笑談嬉遊す。常に、文墨を好み、近臣、及び、搢紳と、應酬唱和す。又、畫師藝阿彌を師として、畫を學び、筆墨、妙境に入る。藝阿彌の父能阿彌、子相阿彌、三世、皆、義政に仕へ、丹青の技、その妙を極め、遺跡、今に至

應酬唱和

妙境

丹青

欣賞

發揮

典型

りて欣賞せらる。その他、繪畫、髹漆、陶磁、彫刻等に至るまで、名工、輩出して、各、その技の精華を發揮せり。後世、美術家は、これを稱して、東山殿時代といひ、多く、典型をこれに取るに至れり。

六月
明治三十三年
夜來

三〇、北京籠城日記その一

六月十九日、夜來の雨、殘なく霽れ、暑氣、いと、強し。午前十時頃より、二・三所に、焰起れり。こは、天主教堂の焼かれたるにて、東・西・南・北・四堂のうち、僅に、北堂を餘せるのみ。予は、例によりて、晚餐を終へ、公使館

晚餐

特使

の守備にとて、出で行く。途にて、公使館よりの特使に出逢ひ、今夜八時半、西公使より、一同に、達せらるべき次第あり。同刻、集合すべしとの旨を傳へらる。何事ならむと、とりどりに、噂ふつつ、公使館に行けば、人人、相前後して、集り來りぬ。皆、心配顔なり。やがて、時刻となれば、館員も、我我も、一同、公使館大廣間に集ひしに、公使は、徐に、口を開きて、今日、支那政府より、各國公使にあてて、今午後四時より、二十四時間内に、當地を引上げよと、いひ來れり。右につき、急に、公使會議を開き、直に、次の數條を議決して、支那

照會

政府に照會せり。

第一、引上の時間を延長すること。

第二、乗車、荷車等を供給せらるべきこと。

第三、沿道保護のため、衙門大臣數人の同行を要すること、及び、北京に向ひ進みをる外國兵に向ひて、衙門より、通牒を發して、至急、入京せしめ、其の上にて、一同、出發すべきこと。

且、これ等の件については、明日午前九時、各公使は、衙門に參集して、王大臣と面議したしとの旨をも、照會したり。然れども、支那政府の事ゆゑ、如何なる

面議

通牒

沿道

準備

危急

返答あらむも、測り難し。ともかくも、各自、二十四時
 間、即、明日午後四時までに、此處を引上げ得るだけ
 の準備をすべし。公使館外、一步を踏み出さば、四面
 皆、敵なり。宜しく、大和魂を振起し、生死、共に、皆、一途
 と、覺悟あるべし。苟、危急に臨みて、國の名を汚す如
 き舉動あるべからずと、いひ渡さる。續いて、柴中佐
 より、途中携帶品等の事に就きて、注意あり。
 それより、各自、平生のとほり、勤務に服しつつ、そ
 の餘暇を以つて、旅行の用意をなす。公使館にては、
 糧食、飲料を調へ、車を集むるなど、準備に怠なかり

徒行

護送

病辱

き。引上ぐるに就いては、無論、鐵道に依るを得ざれ
 ば、通州より、船にて下るか、然らずば、援軍に合せむ
 見込を以つて、鐵路に沿うて、徒行するより外なし。
 いづれにしても、四面、皆、敵なれば、假令、政府にて、兵
 を派して護送すとも、頼にはなるべからず。此方は、
 婦人、小兒など、少からず。我が西公使夫人の如き、久
 しく、病辱に居らるるものさへあり。各國合して、約
 三百五十名の水兵と、僅僅、數十名の義勇隊とにて、
 數百名の老幼、婦女を護り、安全に、天津に著かむ事
 は、殆、望なき事ならずやと、人、皆、竊に、心を苦めぬ。

決然
容子

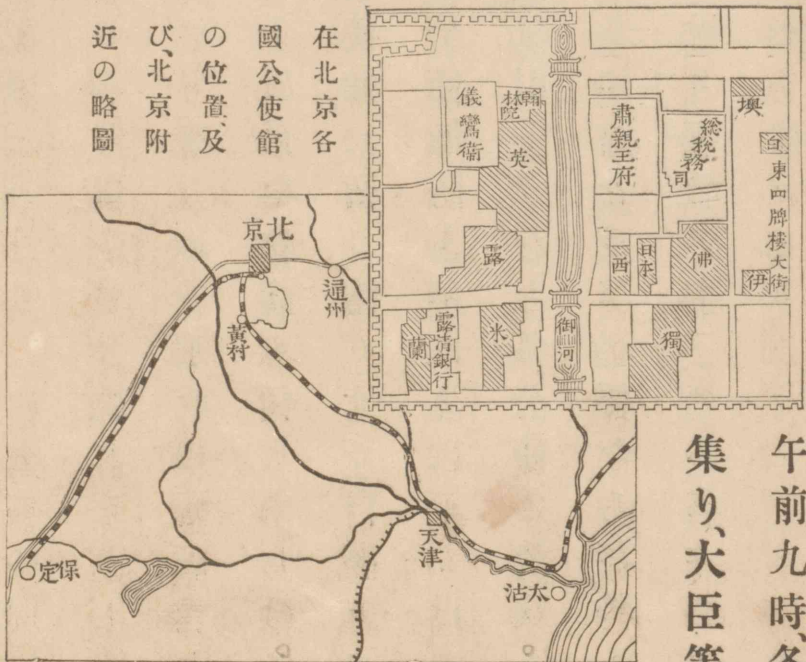
然れども、事、ここに及びては、斃るる處まで行くより、外に、策なき事故、去か思ひ定めては、皆、なかなかに、心、落著きぬ。石井・檜原・中川・小川等の夫人は、決然たる容子にて、衆人の爲、糧食袋を製する等の事にかかり、一夜を明されたり。其のけなげなる舉動には、人、皆、感服せざるはなかりき。

三一、北京籠城日記 その二

六月二十日、朝來、何となく、人人、落著かぬやうにて、物騒し。昨日、公使の決議したる條件に關し、今朝

狙撃
色を失ふ

在北京各
國公使館
の位置、及
び、北京附
近の略圖



午前九時、各公使、總理衙門に
集り、大臣等と、會議する筈な

りしが、獨國公使
は、通譯官を隨へ、
まづ、出て行きし
に、間もなく、途中
にて、支那兵に狙
撃せられたりと
の報あり。人、皆、色
を失ふ。獨國兵、直

言語道斷

に、現場にいたりしに、公使の屍は、所在を失し、通譯官のみ、重傷を負ひ、斃れをりしかば、これを荷ひて、かへり來りぬ。支那兵の暴虐、言語道斷なり。かくなる上は、最早、會議も何もあらばこそ。各國とも、其の公使館に留り、飽くまで、自衛るより外なし。萬一、各國公使館、防ぎがたきに至らば、いづれも、英國公使館に引上げむと、各公使の決議ありしかば、各國とも、老幼婦女及び、必要なる荷物をば、皆、英國公使館に送り、倔強の男子のみ、各、その公使館に留り、一層防禦を嚴にせり。

倔強

銃射

やがて、午後三時すぎ、即、支那政府よりいひ來りし引上の時限、將に、盡きむとする頃、澳國公使館の方面にて、支那兵、銃射を始めしかば、澳國兵、これに應砲し、續いて、英國水兵も、銃射を始め、ここに、愈、支那官兵との戦は、開かれたり。但、十三日以來、我等は、警戒線外に出でしことなき故、外面には、幾何の官兵の、いかに配置せられたるかを、知らず。又、敵の兵力詳ならぬゆゑ、彼我の較量出來ざれば、未、俄に、勝敗を籌るべからざれど、とにかくに、味方の兵力は、僅に、四百餘名にして、去かも、其の中より、伊國兵十

配置

較量

味方

薄弱

優勢

名、佛國兵三十名は、各一士官、これを率ゐて、北堂の保護の爲、同處に出てをれば、ここの守備に任ずるものは、四百に満たぬ兵數なり。この少數の兵力と、その數限ある彈丸とを以つて、構造の薄弱なる公使館内に立て籠り、いかに弱しとはいへ、兵數は、優勢に、彈丸の供給は、十分に、大砲の用意もあるべき支那兵と戦うて、よく、幾日をか支へ得べき。若幸に、支へ得とも、久しきに亙らば、糧盡き、彈丸盡くる不幸に陥らざらむやと、思へば、いと、望、少きに似たり。さはいへ、其の中には、過日、天津を發したる二

廣闊

要衝

千の兵の來著を見るべしなど、頼みがたきを頼みつつ、とにかくに、運をば天に任せぬ。

六月二十一日、朝來、英、澳、兩國兵、頻りに、銃射せり。我が守備線内に、肅親王府あり。府内廣闊にして、西は、御河を隔てて、英國公使館と相對す。府内、西北隅より、南に亙りて、小丘あり。丘上よりは、英國公使館を、眼下に見下すべく、南は、我が公使館、及び、佛國公使館の後方を護り、北は、長安街に連りて、敵地と相接し、守備上、最、要衝の地なるゆゑ、ここに據りて、守ることとなれり。守田大尉、安藤大尉は、今日より、水

繁忙

兵、及び、義勇隊の一部分を率ゐて、府内北面の守備に任じ、支那教民を督して、防禦工事を施すに忙し。これによりて、我が守備線は、著く、延長し、兵員の勤務、頗、繁忙を加へたり。夜に入りても、銃聲絶えず。此の日、支那皇帝は、列國に對して、開戦する旨の詔を發せらる。(服部宇之吉―北京籠城日記)

再訂高等女子讀本卷三終

明治三十九年十一月十九日訂正二十七版印刷
 明治四十年一月三十日訂正二十七版印刷
 明治四十一年十一月十四日訂正二十七版印刷
 明治四十二年一月二十日再訂再版印刷
 明治四十二年二月一日再訂再版發行

再訂高等女子讀本

全十冊 定價 各金貳拾四錢

校訂者 佐藤球

編纂者 明治書院編輯部

發行者 三樹一郎

印刷者 三島宇一郎

印刷所 弘文堂印刷所



發售所

東京市神田區錦町一丁目
電話本局二四三八番

明治書院

(振替貯金口座四九九番)

東京市神田區南乗物町
電話本局八九二・一六四番

明治圖書株式會社

(振替貯金口座四九九番)

